

四、帰国後の生活と子孫への遺言

昭和二十二年八月十三日、私も二千人の同志は、日の丸の旗をなびかせた日本の輸送船「遠州丸」に乗船を許され、「これで生きて故郷へ帰れるぞ」と感激しながら飛び乗り、八月十五日、夢に見た舞鶴港に上陸、翌十六日、富士山の麓、山中湖畔の父母の待つ我が家にたどり着くことができました。

その後、私は父の事業を継いで旭ヶ丘の別荘地に家建て、観光客を相手にホテル事業を経営し国家再建のため働いて、妻良子とともに元気な二男を育て幸福な生活をしています。この労苦調査を申し上げるに際して、子孫や国民の皆さんにぜひお願いしておきたいことを次に申し上げます。

1 戦争は絶対にしないで下さい。

2 家庭の者はみんな仲よくして、よく働き、幸福な家庭生活をして下さい。

以上をお願いして、私のシベリア抑留の労苦調

査報告を終わります。

強制抑留者が語り継ぐ労苦

山梨県 渡辺喜明

一、出生から終戦まで

私は、霊峰富士山の麓、富士吉田市新倉に生まれましたが、故あって忍野村内野で育ち、忍野高等小学校卒業後、昭和十二（一九三七）年十月、山中郵便局員として勤務していましたが、戦时下、現役兵として東京代々木第七部隊（輜重兵連隊）に召集され、昭和十六年七月十七日入隊、直ちに満州国浜江省ハルピン第四五一部隊に転入され、大連経由でハルピン駐屯隊に入隊しました。

私は、農家育ちで農耕馬を取り扱っていて馬の飼育や調教が上手だったので、中隊一の馬匹訓練士として下士官（班長）に任官しましたが、部隊は昭和十九年九月、黒河省孫吳に移駐し、私も

は黒河近くの孫呉飛行場勤務となり飛行場の周辺警備や飛行用物資の輸送勤務についていました。さらに昭和二十年七月、黒河からソ満国境近くに展開してソ連軍と対峙中、昭和二十年八月九日、ソ連軍がソ満国境を突破して南下したとの情報を受け、対戦軍攻撃班を編成し、火炎瓶肉迫攻撃を準備していました。八月十五日、終戦の詔勅をラジオで傍受しましたが、私どもの部隊長はこれを信ぜず、関東軍の命令がない限り我々部隊はソ連軍と戦を継続すると言って、部隊を大興安嶺に集結布陣して対峙しました。

八月二十五日早朝、私ども部隊の展開する陣地上空から関東軍司令部命令のビラがまかれ、「ボツダム宣言受諾ニヨリ停戦、部隊ハ戦闘ヲ中止、ソ連軍ノ指示ニ従ウベシ」との指示があり、二十七日正午頃、ソ連軍の戦車十数台が大興安嶺陣地を包囲する形で武装解除されました。

それから私どもは千人ずつの作業隊に編成され、「東京ダモイ」だとせき立てられて徒歩で二

日、黒河から船でブラゴエシチェンスクに渡り、そこから貨車に乗せられて一週間くらいシベリア鉄道で北上し、着いた所はシベリアの中央ジップヘーゲンという田舎の街中でした。九月二十日、もうここは零下二〇度を超え粉雪が舞っていました。

駅から約三時間歩き、原始林近くの小高い台地に軍用天幕を張って露営しながら原始林を伐採し、凍土を掘って丸太積み半地下式の宿舎（一棟に百人宿泊、千五百人で十五棟）を建てたので、約一カ月間、伐採と収容所造りの毎日が続きました。

二、収容所での作業と生活

収容所での作業は、主力が伐採とシベリア鉄道に沿っての車道造りで、三十メートルもある広い鉄道敷を造られました。

また他のグループは、付近の農場の手伝い人夫、市内の家屋建設、水道工事人夫等に三十人単

位で作業組をつくり労役させられました。何の仕事にもノルマが必ず決まっていました。伐採作業は二人一組、三立方メートルはどうか一〇〇パーセントできましたが、その他の仕事は約五〇パーセントくらいしか達成できず、その成績によって給与が支給されるといふ規定でしたので、食糧も少なく栄養失調症の病人が続出、私どもの中隊でも約一割くらいの戦友が亡くなりました。

私は農村育ちだったので頑健でしたし、また同郷の富士吉田市弁天町の渡辺久雄君と同じ中隊だったので、同じ戦友組として助け合って働きましたのでノルマも達成でき、「ハラショーラポータ」として表彰されたものでした。

困ったことは、下着も被服も支給されず着のみ着のまま、入浴もなく体は真っ黒、シラミが発生して夜も寝られない始末でした。特に私たちの収容所付近（ジップヘーゲン）の水質が悪く、飲めばたちまち下痢となり、薬もないので木炭の粉を飲ませられたりして栄養失調症となり、多くの戦

友が亡くなりました。

私も昭和二十一年十月頃、伐採場で喉が渴いたので雪を溶かした水を腹いっぱい飲んだところ、その晩から下痢となり、風邪気味もあって翌朝から三九度の熱発をしてみましたので、「もうこれで私も命はないだろう、どうせ死ぬなら人の厄介にならぬように」と思って、真っ裸になって亡くなった戦友の屍体置場に行つて屍体の中に割り込んで寝たままでは覚えていましたが、しばらくして氣を失ってしまいました。氣がついてみますと、不思議なことに屍体置場小屋の窓から北斗七星が輝き、私は生きていたのです。熱が下がって頭もスッキリ、ただ母の声が「喜明、死んではならぬ、生きて日本へ帰るのだ」と呼んでくれていたことだけ覚えています。私は生きていたのだ、と泣きながら裸のまま部屋に駆け込み自分の床に入つて、まだまだ死んでたまるか、と氣を持ち直して頑張りました。

その後のある日、私は持っていたステンレスの

小さな鏡をソ連の女医さんに上げたところ、その女医さんが大変喜んで特別に私を可愛がってくれようになり、よく官舎（私邸）の清掃や使役に使ってくれるようになりました。

お蔭様で伐採に行くこともなく、毎日、女医さんの家へ行って家内や周辺の掃除をしたり薪割りをしたり、菜園の手入れをすることが日課となりましたので、部屋も庭も見違えるほどきれいに清掃しました。女医さんも喜んで黒パンや煙草を分けてくれたので、私も次第に健康を取り戻し、生きて帰れたのもこの女医さんのお蔭だと今でもありがたく思っています。

三、生きて東京ダモイして

昭和二十三年一月頃から私も、ジップヘーゲン第五一収容所でも共産主義教育が盛んになり、「早く民主教育を勉強した者を早く日本に帰す」ということでしたが、この年の七月一日突然、全員に「東京ダモイ」の収容所長命令が出ま

した。それから約一週間、毎日「赤旗の歌」とかデモ行進、集団教育など民主教育があり、七月九日、ヘーゲン駅から貨車に乗せられナホトカ港まで夜間シベリア鉄道で南下し、ナホトカ港に十五日下車。それから約一週間はナホトカ収容所で毎日民主化教育で、「日本革命」の方法論などを聞かされました。

七月二十二日の早朝、ナホトカ港の岩壁に着いた「栄豊丸」に乗り込んで、夢に見た日本国舞鶴港に七月二十四日、上陸することができました。

四、帰国後の生活と家族への遺言

私は帰国後、山中湖村山中で妻はつえと、男、女の子を育て、家族とともに幸福な生活を送っています。生命の大切さと平和な生活の大切さを感じています。

これからは戦争は絶対にしてはならないし、どうか家族は仲よく親を大切に、嫁、姑は助け合って楽しく暮らしてもらいたいと願っています。

最後に、私は子供の頃から苦勞したが、運がよ
くシベリア抑留にも耐えて生還し、家を興し家族
と楽しく生活できたことに満足しています。これ
からも世界の平和と家族の安泰を願いながら、私
の報告を終わります。

強制抑留者が語り継ぐ労苦

山梨県 天野 清 一

一、出生から終戦まで

私は、靈峰富士山麓の高原、標高千メートルと
いう山紫水明の忍野村忍草で生まれ、農家に育
ち、非常時日本の軍人となるため志願して昭和十
九（一九四四）年十二月一日東部第七三部隊に入
営（甲府第四九連隊）。直ちに北支派遣歩兵第一
一〇大隊に入隊を命ぜられ、北支の山東省德州、
衣第三〇四一部隊に入隊し、歩兵砲班で実戦訓練
を受けた後、ソ、満、朝、三国の国境地帯の国境

警備（陣地構築）につきました。

昭和二十年七月、朝鮮咸興の飛行場警備隊とし
て南下し飛行場の警備中、八月十五日、天皇陛下
の終戦の詔勅が下されたと聞きましたが、私ども
の部隊長は「それはデマだ、日本の軍隊は神の国
の軍隊だ、米国なんかに負けるか」と、大本營発
表を信ぜず飛行場を守っていましたが、八月二十
三日朝、ソ連軍が戦車で飛行場に侵入、私どもは
戦いもせず、その場で武装解除されました。

二、終戦からシベリア抑留まで

九月初旬の朝、非常呼集で「東京に帰る（東京
ダモイ）」とソ連兵に騙され、咸興から興南まで
二日間徒歩行軍。興南の港で貨物船に押し込めら
れ、船は日本海へ出たが、そのまま北上し一日半
も海上を漂っていたが、九月十日頃、大きな港に
上陸させられた。そこがウラジオストックという
軍港だとソ連兵が教えてくれました。

「東京ダモイ」だと喜んでいた我々の夢は消え